

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第189号（2022年2月）



白井啓治

（二七）陽のぬるみスギ花粉も恋もとめ

（2009年2月19日）

『ホクケツキョ 下手糞でも春の声』

桜吹雪はよく知るが、梅吹雪も美事なものであることを初めて知った。里山の斜面一面に咲き乱れる梅の花に圧倒されてきた。そして梅吹雪なるものもあることを知ったのであった。

梅の花というと、日差しの幾分ぬるみ始めてきたことを感じながらも、未だ寒さに震えながら静かに咲くものというイメージを持ってしまうのであるが、先日散歩してきた里山の斜面にある梅畑の咲き乱れる姿には、こちらの勝手なイメージを一変に吹き飛ばしてしまう迫力があつた。

むせかえるような花の香、と表現したら誰も梅の花とは思わないだろう。しかし、その里山の梅林は、まさに梅の花の香にむせかえるような圧倒感をもって迎えてくれた。

しかし、ちょっと昔には、この圧倒するような花の香や、花吹雪は見られなかったのだそう。最

近の温暖化の所為で、梅の花も桜と見間違ふほどに一齐に満開となり、むせかえるような香をまき散らして、吹雪の花びらを舞わせるのだそう。その話を聞いた途端感動の持って行き場に窮してしまつた。

梅林の向こうには全く手入れされないで、雑木林と化したスギ林が赤茶けた色に染まっていた。もう二、三日も暖かい陽気が続いたら、恋を求める杉の花粉達が春の舞いを一齐に舞い、飛び出していくのだろう。東風の吹いたら天空をまっ黄色に染めながら自分の恋の季節を唄うに違いない。



（絵： 兼平智恵子）

私は幸いなことに今のところスギ花粉症ではないので、車の屋根が花粉まみれになるのを嘆くだけで済んでいるが、花粉症の人にはスギ花粉の激し

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

すぎる恋を恨んで涙と鼻水に塗れることだろう。散歩の帰り道、里人に出会ったので、この里山には桃源郷はないのかと聞いた。この辺では桃は作っていないのだと言われた。そのかわり柿木の林はあるよ、と言われた。では今度は柿若葉を褒めに来なければいけないと、里山の風に吹いて降りてきた。

（本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。）

緋桜怨節

兼平智恵子

石岡市菖蒲沢にある菖蒲沢古道を知ったのは平成十七年、葉を落とした木々が紫に染まり、心なしか春が膨らんでいる頃でした。ふるさと、風の発行に熱意を注いでいた、故白井啓治代表の先導でした。

大木やうつそうとした竹林の中を古道らしく、薬研堀に似た道なき道、落ち葉に隠された風化した石段を確かめながらの古道でした。

その後まもなくして、この古道は道沿いの木々は切り倒され、切り倒された木々は丸太として、道の整備に納まり、森林浴が楽しめる新しい道に変わりました。

昭和初期頃までは薬師堂に納められている菖蒲沢薬師如来さまに大勢の参拝者で賑わったというこの古道は、現在では手軽に楽しめるハイキングコースとして、また地域の歴史や里山の景観を楽しめる、変化と起伏に富んだウォーキングロードになっています。しかしこの新しい古道を故白井啓治代表は大層気にかけていました。

この古道への思いを常世の国の朗読物語「緋桜怨節」に託しました。

緋桜怨節（ひざくらうらみぶし）

Ⅱ菖蒲沢薬師堂弁天池秘聞Ⅱ

二〇一七年五月二〇日発行

著者 白井 啓治

表紙絵 兼平智恵子

発行 ふるさと風の会

朗読物語「緋桜怨節」前文をご紹介します。

—— 石岡市菖蒲沢に高さ約二メートル半の薬師

像を祀った古いお堂がある。



お堂までの山道には馬暦神、二十三夜供養碑、氏神様、不動尊、天白稻荷神社などがありいかにも信仰の山といった感じのする、そのまま手付かずに保存しておきたい所であった。

ところが、この薬師堂に登る道「菖蒲沢古道」と名付けて新道を整備してしまった。国の予算を貰ったの整備なのだそうであるが、いわゆる昔からの道を古道と名付けて整備してしまうとんでもない新道になってしまふのだから不思議である。

薬師様もさぞかし驚いておられるであろう。信仰の山には苦行してこそのご利益だろうと思うのだが、安楽に果たしてご利益があるのだろうか。

何と言っても霊山の古木を、殿の御成りの邪魔とばかりに打ち首にし、駕籠で登るような道にしてしまったのだから、お山の嘆きは大層なものだと

思う。

以前に、山桜の頃この山道を訪ねた。古木の立ち並ぶ隙間から薬師堂とその下にある弁天池を望める高台に、道を塞ぐように立ちはだかり、ひとときわ赤い色をつけて咲く山桜の太い古木があった。その赤く咲く山桜をみあげて

「ひっそりと薬師如来の座りおる山桜」

「山桜咲く枝の見あげて薬師如来の何を想う」と一行の文を呟いたのであった。

しかし、その一行の呟きを詠わせてくれた山桜の太い古木は、国家予算のお通りの邪魔だとばかり見事に打ち首を貰っていた。その打ち首となった古木の切り株に腰を下して、頭上のすっかり開けてしまい、広々とある天空を些か呆れかえり、感傷の思いに見上げたとき足元から、

『お願いでござります。再びの命、お守りください』という声が聞こえてきた。腰掛けた股の間から足元を見ると、首を打たれた切り株から緑葉を付けた生まれたての小さな枝が揺れていた。慌てて小枝を庇って足をずらしたところ、

『ありがとうございます。この生まれた双葉が無事に育ちますかは、天命でござりますが、天命と諦める前に枯れさせてしまいますのは、余りにも雪殿に申し訳ございません。もう間もなくに雪殿からお預かりいたしたものが、全て土に還ります。お預かり物がすべて土に還りますには、私の命ももう少し繋ぎとめておかなければなりません。そうしませんと、お預かりしたものが化石となってしまい土に還ることは出来ません。私が首を打たれるとき、随分と大声を上げたつもりでしたが、誰一人気付いてくれたものが居りませんでした。生まれた双葉がこの夏をすごすことが出来ました

ら天命があたえられるでござりましょう』

という声が切り株の地面に這わせた根子のほうから聞こえてきたのであった。そして、双葉によって命をもう少し繋げねばならない話を聞かせてくれたのだった。――

これから先は雪、佐助の声、凡海の声、留吉の声と切り株からの声、どのような展開になりますか……

白井代表の朗読と小林幸枝さんの渾身の手話舞のスナップご覧下さい。そしてどうぞふるさと風の文庫「緋桜怨節」お手にして頂ければ嬉しく存じます。

三周年記念公演十月一七日に於いて



○ 薔真っ赤に染めししだれ梅

智恵子

※先月一月号に字の誤りがありました。

(正) 一喝 (誤) 一喝 訂正致します。



労音時代の回想

木下明男

今年は沖縄が日本に復帰して50年。1972年に返還された沖縄は、主権は返還されたといっても全島基地だらけ、しかも地位協定により米軍の横暴は収まらない。1960年代から1970年にかけて、職場での民主化運動やベトナム戦争反対、沖縄返還等々の政治課題を掲げての戦いが激しく行われた。労音は文化団体として、ベトナムに楽器を送る運動や沖縄との文化交流で活動を進めた。沖縄変換闘争のシンボルとして、盛んに「沖縄を返せ」のうたが歌われた。九州の三池闘争の中から生まれた、労働者作曲家「荒木栄」による歌だ。職場争議や色々な集会、ミーデー等々で歌ったものである！

「へ固き土を破りて

民族の怒りに燃える島 沖縄よ

我等と我等の祖先が

血と汗を持って 守り育てた 沖縄よ

我等は叫ぶ沖縄よ 我等のものだ沖縄は

沖縄を返せ（返せ） 沖縄を返せ」

復帰から50年たった今でも、沖縄から基地はなくなり、米兵による犯罪は収まっていない。しかも、地位協定により、犯罪者は基地に逃げ込めば日本の警察は何もできない。米軍は本国から税関や入国審査なしで沖縄に来る。そしてフリーパスで基地外に出られる。今問題のコロナ罹災者も検査なしで、市街を横行している。

沖縄にコロナ感染者が多かった一因でもあり、日本の政府は米軍にお願いしかできない。何か変である。欧米を中心とした最前線基地の沖縄はまるで、米軍による不沈空母の用だ、困ったものである。

1970年労音は、新宿区信濃町にあった本部を水道橋に移転（労音会館を会員の寄付により建設）。同時期、本国復帰を果たした沖縄県は東京事務所を求めていた、其処に労音本部跡地の売却を決める。副委員長だった私は、その契約のため、1975年沖縄を訪問。土地の売却代金（3億数千万円）は、国税局に入場税の未納金として支払う。（その時期労音は、興行ではないワリカン制の音楽会・・・従って入場税は発生しない！・・・と、不払いを国税局に通知し、裁判闘争を行っていた。しかし、高裁でも敗訴になり、最高裁で争議中に和解することに決めた。当時労音に課せられた税金は、本税と延滞税を含め5億を優に越していた。和解協議の結果、本税のみを支払うことで決着）

復帰前は、渡沖するのにパスポートが必要だった。通貨は米ドル、車の通行は右側・・・。復帰して数年たっても、当時の沖縄は右側通行。海外旅行をしたことが無かったので、右側通行に違和感を持った。お店等の支払いはまだドルが通用。国際通り等の繁華街は、米軍が彼方此方にたむろしていた。返還後間もなく、海洋博が開催された。（1975年沖縄県アツピール政策

の大きなイベント）沖縄全島民の1／4が戦争で犠牲になった・・・？その戦争の遺跡、ひめゆり平和記念資料館、摩文仁の丘、守礼の門、数々の地下壕などを案内して貰う。沖縄線の激しさ、痛ましさを目の当たりにして、戦争の愚かしさを実感。そして、開催中の海洋博を見学、私にとつての初の海外旅行であった。

沖縄復帰50年で、あらためて沖縄からの基地反対、そして二度と戦争を起こさないための「平和憲法」の大切さを感じた。



地域に眠る埋もれた歴史(77)

木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】(3)

法龍寺―親鸞の孫「如信」が没した地

常陸大子から国道461号線(黒羽街道)を馬頭(那珂川町)や栃木県大田原市方面に進み、旧上岡小学校から1〜2km程先に行ったところの旧道沿いに「法龍寺」がある。

この地が親鸞聖人の初孫である如信(によしん)上人が入滅した場所だと知ってやってきまし

た。

親鸞は1211年に越後での流罪から放免され、しばらく越後にとどまった後、善光寺や上野国などを経て、常陸国下妻市小島で草庵を結び、大山草庵や稲田の草庵で布教活動をしていました。

そして約20年間の東国布教活動を弟子に任せて京に戻ったのは親鸞60〜62歳頃だと言います。

しかし、親鸞が帰郷した東国では親鸞の教えが必ずしも正確には伝わらず、徐々にその考えから離れていきます。

これを嘆き、自分の直系である長男の善鸞と孫の如信を東国に派遣します。(1253年)

しかし、善鸞は親鸞の考えと違う東国の考え方に染まってしまい、とうとう親鸞は我が子である善鸞を絶縁し自分の正当な継承者から外してしまいました。(1256年)

(歎異抄は後に弟子が親鸞の教えをまとめた書物で、異教を嘆くという意味だと思います)そのため孫の如信(当時如信はまだ21歳頃?)が親鸞の教えを正式に継承する事になりました。この如信は常陸国よりさらに北へ布教を広げます。そして陸奥国大綱(現、福島県石川郡古殿町)の草庵を拠点にかなり大きな布教集団を持つようになります。

この大綱の草庵はその後「願入寺」となり茨城

県の大洗に移っています。

この茨城県大子町上金沢の「法龍寺」は如信が布教の時にここに「太子堂」を建立しました。その後を門弟の乗善房が引き継ぎ布教活動をしていました。



如信は親鸞の跡を継いだため、廟処である京都の吉水の北辺「大谷廟堂」(大谷本願寺跡)を継承していたが、そちらは親鸞の末娘である覚信尼とその子覚恵に任せて、この北の地で布教活動が続けられました。

そして、京都の地を引き継いだ女性2人は何度も如信に京都に戻ってくれるように懇願していたと言います。

しかし、如信はこれを受け入れず、そのまま常

陸国や陸奥国に残っていました。そして年に1度の法要などで京に戻って来ていたようです。そして1299年に報恩講のため如信は京都に戻る途中で乗善房に請われて、この太子堂に立寄ります。しばらく逗留して布教活動をしていたのですが翌年の1月4日に病のためこの地で急死してしまったのです。年は66歳でした。さて、親鸞の正当な継承者であった如信が急死したため、その跡を継ぐ人の指名がなされませんでした。

しかし、覚恵の子である覚如(かくによ)が「大谷廟堂」を寺院化して「本願寺」(大谷本願寺)とし(1321年)、親鸞、如信、覚如と継承されていきます。

しかしこのあと東西に分裂してしまいます。この(大谷)本願寺も1465年に比叡山の僧兵によって破却されてしまいます。



「榎(かや)」樹齢約720年。

如信がここに太子堂を建てた時(1289年)に自ら植えたものと言われているそうです。



こちらはカヤの隣にあるイチヨウの木。

如信の13回忌法要の時に覚如が植えたものと言われています。



ひたち小川文化「第二号」より 伊東弓子

一月号に続き、二月号に池上和子先生の調査報告 下吉影押久保家文書(第一集) 西宝珠花村一件留帳

天保十一年十一月六日(西暦換算一八四〇年十一月二十九日)

をもとに、後半をお届けします。

水戸殿御船頭けんか始末記

―天保十一年西宝珠花村一件―

池上和子

一月号よりの続き

2 騒動後始末

翌七日、騒動はおさまったものの、河岸には大勢の人数が寄り、中には竹槍を持った者もいる。

水戸側では前日の二の舞にならぬよう、通り掛かりの他藩手船の船頭頭五人に河岸の鎮方を依頼した。この日は何事もなく終った。

八日の昼頃、江戸から水戸家目付方四人、夕方には、幕府代官所の手代が検使役として到着した。この両者立合の上、名主権平方に捕えられていた惣衛門・庄蔵を引取った。その後ケンカ場所改め(現場検証)、けが人改め、九日には手船二艘の改めが行われた。

十日、江戸小石川上屋敷から、更に役人四人供廻り九人小梅水主六人、下吉影から運送方役所手代二人が到着した。

十一日、手船二艘は小梅水主によって江戸回送されていた。

十三日、すべての検分を終え、役人は西宝珠花村を引揚げた。惣衛門等九人は、江戸藩邸の役人と共に小石川屋敷に引取られた。

事の重大さに驚いた西宝珠花村では、近隣の三カ寺と名主八人を立て、検分の役人に内済(和談)を願い出た。だが、これは一蹴された。

3 水戸藩の対応

水戸藩はこの河岸騒動を次のように受け止めた。

○ 水主の酔興の上、心得違のケンカで、この点で水主の非は認める。

○ しかし、ささいな事からのケンカであるのに、村内の者は多数で、水戸家手船の船頭水主と承知の上で乱暴を働いた。

○ 手船の船印を破り、船貢に損害を与えた。これらは全く徒党の始末であり、甚以不束(はなはだもってふつつか)の者共である。

つまり水戸家の対面を著しく傷つけられた。村方の狼藉は許せないという事である。この事態に對して、水戸藩は断固とした態度で臨むべきであるという事になった。

十一月二十日、水戸藩から時の老中水野越前守忠邦へ、この一件について、強硬な申入れをした。

水戸側から西宝珠花村を相手取り、双方の吟味を願ひ出、幕府の裁決を仰いだというのである。結局、この申入は受入れられ、勘定奉行佐橋長門守掛りで裁判が進められる事になった。

船頭惣衛門と水主七人は、国元に帰らず、小石川上屋敷御用長屋に滞在する事になった。

御用長屋に着いた翌日、藩から彼等に物品が支給された。

○ 船頭には麻上下・縞袴・紋付羽二重小袖・大小刀、水主へは黒わた入他、傘・下駄・ぞう

り等。

○ ふとん・火鉢・たらい・食器・炊事道具一切。
○ 扶持米・みそ・漬物・汁の味・薪炭・魚油等、規定分量に従って支給。

彼等には、同僚の船頭が交代で指添役(さしそえ)やくとしてつけられた。指添船頭は彼等の世話役でもあり監視役でもあった。

4 裁判経過

勘定奉行佐橋長門守による裁判は、天保十一年の暮から天保十三年春まで、足掛三年かかった。その間に七回の呼出をうけて、吟味された。

△初呼出△天保十一年十二月十二日▽

水戸側のみの呼出。

市ヶ谷浄瑠璃坂にある佐橋長門守宅へ出向いて吟味をうける。小石川藩邸から、当事者船頭水主九人と指添船頭一人の他、水戸家小十人目付荒川戸田右衛門はじめ、目付同心・押役・先手同心・目付小遣・荒川供廻り江戸部屋草履取・ちようちん持・計三十一人が、打揃って出かけた。この人数は、裁判中ずっと変わらない。呼出をうけて奉行宅へ向かう時には、ゾロリと右の顔が揃うのである。相手方の西宝珠花村側は、呼出人数が揃わず、代兼者(一人が自分と他人の分を兼ねる)がいるのとの対照的である。

奉行宅では、荒川は奥の間へ通される。目付同心・押役・船頭三人(計五人)は玄関脇の溜りの間に水主他二十五人は表腰掛に控える。吟味中、船頭三人は薄縁の上、水主七人は土間にすわる。このように身分の違いではっきりと区別されている。初回の吟味は、当事者の確認と、事件当時の一通りの申立てで終わった。

△第二回吟味△同年十二月廿四日▽

双方呼出。相手方は名主権平はじめ村方の者九人(内女四人)事件当日のけんかの発端を重点に吟味された。

△第三回吟味△天保十二年閏正月十五日▽

双方呼出。相手方十六人。

この日の吟味で、双方から入牢者が出た。

○ 水戸側△水主政蔵・万蔵

両人が刀を抜き相手方を疵付けた件については、申し開きの余地無。十五日より入牢

○ 相手側△名主権平はじめ十人、伝馬町獄舎入牢。の外六人は手鎖宿預け。

政蔵・万蔵の入牢に際し、水戸側では兩人に用意金として一両二分持たせた。何のための用意金か?それはまさに“地獄の沙汰も金次第”だからである。牢獄の中では、隠然たる囚人の身分制があった。牢名主が一番えらくていばっている。新入に對しては、届物によって取扱いが違った。水主二人に持たせた一両二分は、その牢名主へのみやげ金なのである。

政蔵・万蔵の入った牢部屋の牢名主は、元船乗で兩人の顔見知りであった。果たして用意金は効を奏し、殊の外牢舎内での待遇はよかったという。一方、権平等十人の入牢の様子はどうか。十五日入牢して、翌十六日の呼出には吟味場まで自力で歩けず、椅子にのせられてきたのである。牢舎ですごした一晚がどんなものであったか、想像に難くない。

又、藩は水主出牢について、各方面へ働きかけ、二十三日に出牢させている。たった八夜の入牢期間であった。西宝珠花村名主権平が、入牢四十日余で牢死したのと明暗の対照をなしている。

△第四回吟味Ⅱ同月十六日▽

双方呼出

○ 船頭二人の吟味に重点が置かれた。惣衛門・甚四郎供、水主供の制詞方（取締方）が不行届である。殊に惣衛門は、小川屋二階で村方の者に口車にのせられて、十手・刀を相手方に渡し、帯刀指に似合わざる事として追求をうけた。

○ 相手方。とくに権平の行動の吟味。権平は名主であり、村方のさわぎを押える立場である。その点を厳しく追求された。

△第五回吟味Ⅱ同二十三日▽

双方呼出。

下口書（おおよその供述書）作製。

：二月八日、小梅御藏下につないでおかれた、惣衛門乗・甚四郎乗の手船二艘は、国元へ向けて出帆した。

△第六回吟味Ⅱ同五月二十九日▽

双方呼出。口書極め。

：これまでの吟味をもとに、奉行所留役が作製した調書を読み聞かされ、承知の印形を押す。これで吟味は終了したことになる。

△第七回Ⅱ天保十三年三月十八日▽

「仰渡」（判決）

跡部能登守直々の仰渡。

（この一ヶ月前に、佐橋長門守は役替になり、その後役が跡部能登守である）

○ 水戸側

押久保惣衛門Ⅱ船頭役罷免・押込百日

石毛甚四郎Ⅱ押込三十日

政藏・万藏Ⅱ入牢の上擲（たたき）・中追放

久藏・岩吉・米藏Ⅱ押込五十日

源七

庄藏

○ 相手方

喜太郎Ⅱ（牢死）存命ならば遠島

名主権平Ⅱ（牢死）存命ならば中追放

（以下名前略）

急度呵（きつとしかり）・下総国御構追放 三人

江戸十里四方追放

所払

手鎖

過料（罰金）五貫文

過料三貫文

過料六貫五百文

呵置

これをもって、西宝珠花村河岸騒動は、一件落着となった。

5 それからの惣衛門

勘定奉行の仰渡から四日後、一番罪の軽かった庄藏は、藩の目付方の計らいで、下吉影へ送り帰された。

政藏・万藏は、伝馬町牢舎門前で五十擲をうけた。藩から貰った金一分を懐に門前から去っていった。

押込の五人は、藩の御用長屋で慎しむ事にまつた。そして押込日数を経た者から順に国元へ下っていった。ひとり残された惣衛門が、押込百日の刑からとけたのは七月一日であった。二日、江戸屋敷の役人衆に、江戸滞在中の御礼かたがた帰国のあいさつをすませると、すぐ江戸を出立した。身一ツで下吉影に着いたのは、七月四日真夜中であつた。

天保十一年十月、手船に年貢米を満載して下吉

影を出てから、約三年の月日が経っていた。

水戸御船頭をクビになった惣衛門が、その後どのように暮らしていたかは知る由もない。文久二年・慎徳院（第十二代将軍徳川家慶）三回忌法事の御赦により、押久保惣衛門の罪は御免となった。江戸からの御赦の御達が届いた時、すでに惣衛門はこの世にはいなかった。

（一）一件と水戸藩

惣衛門にとって、この一件は、生涯における一大不祥事であつた。思いもかけない事件にまきこまれ、自分の一生を棒にふつたともいえる。しかし、この一件は「水戸御船頭とは何なのか」を、関東の流域に知らしめた事件であつた。

水戸船は、ややもすると嵩にかかった行為も少なくなかったところから、流域の船頭水主衆や河岸場の反撥をかっていたことだろう。

ところが、水戸藩の対処の仕方は終始威圧的である。

（i）まず、河岸騒動の検分につけた江戸藩邸の役人衆の一行は二十余人と多人数である。又、村方からの内済申入に対しても、ケンもほろろにはねつけている。（もし内済が成立すれば惣衛門はそのまま船頭でいられたであろうし、村方も牢死を二人もださなくてすんだであろう。）

（ii）水戸藩としては、村方の非を公的に明らかにして制裁するという方針で、時の老中を通じて裁判に持ち込んだのである。水戸家の船頭水主衆、手船に乱暴を働いたという事は、とりもなおさず、百姓の分際で水戸家臣に立ち向かった、水戸家に損害を与えたという事

である。あくまでも支配者側の論理で決着をつけようとしたのである。

裁判進行中も、水戸家の態度は高圧的である。水戸川の当事者は船頭水主九人であるにもかかわらず、吟味呼出のたびごとに、藩士供廻りを入れて三十人余で臨んでいる。相手の百姓共へは横目でジロリ、裁判担当の勘定奉行へは手ぬるい裁きは許しませんぞと言わんばかりである。

(iii) 結果はどうであったか。仰渡を見れば一目瞭然である。(二)の4)

惣衛門は、手下の水主取締不行届として、責任を問われた。又、事情はどうあれ、士分の者が大小刀を、百姓ごときに渡したという点を責められている。水戸御船頭は単なる船乗りでなく武士であると強調しているのである。

相手方の百姓は人数も多く、課せられた刑も重い。水戸家の制裁の目的は果たせたとみてよい。

この仰渡(判決)は関東水系の河岸場・川船関係者に、改めて「水戸御船頭」の背景を認識させる事になった。その意味では、西宝珠花村はみせしめにされたともいえる。

(完)

以上二百年余り前の流通、地域の生活ぶりが目に浮かびます。今迄よりすべての面で苦しかった生活を生き抜き、地域にしがみついていた私達の先祖の姿が見えてきます。

私達に残された、与えられた“地域の歴史”を伝えていくことを確り考えていく、具体的にまとめていく時期に入りました。水戸藩、玉里御留川

もこれでいいのか、これでいいのかと思考錯誤しながらやってきました。コロナに負けないで月二回の冊子づくりの作業が続けられています。出来る上がるのは、夏か秋か報告をかねて“和子先生をしのぶ会”も秋の彼岸の一周忌頃になってしまいうそうです。一つ一つ行っていくことが、将来へどう伝わるか、どう生きていくかを示していくものだと思っています。

記念碑を建てて仕上げたいと思っています。やる必要があるか、ないかはともかく、やらなければそれはそれ、やればやるでそこに意味があり、みんなで確り考えていきたいと思っています。ただ、ただ貴女を思うと涙がでます。

御朱印集め

小林幸枝

私は、神社の御朱印集めには興味は無かったのですが、先日常陸国総社宮でかわいい御朱印を見つけて、その可愛らしさに癒されて興味を持ちました。

石岡が府中松平藩と呼ばれていた江戸時代末期、藩主・松平播磨守に仕えた手塚良庵という藩医がおりました。この良庵は世界的な漫画家・手塚治虫先生のご先祖です。

常陸国総社宮では当地石岡と手塚先生の御縁にちなみ、風土記勅撰千三百年にあたる平成25年に、手塚プロダクションの協力を得て先生の作品を象った授与品の頒布を開始しました。

私は、常陸国総社宮×ジャングル大帝の御朱印帳を購入しました。

一つ手にしてみると、このかわいい御朱印や、かわいい御朱印など、色々なデザインの御朱印集めをしたいと思うようになりました。また、これから各種御朱印帳も集めたいと思います。

皆様もマナーを守って参拝し、御朱印集めを楽しみましょう。



新たな挑戦

12

菊地孝夫

前回の物語は、いささか尻切れトンボに終わってしまいました。十分な準備と構想を温める時間が必要だったのに、それを怠ってしまったという面があります。

多くの物語に登場する狐と比べて、狸はその変身する能力とか使える神通力が弱いような気がします。

筆者の知りうる範囲では、中国や朝鮮などの民話などでは、タヌキが人を化かすような話はないようです。「九尾の狐」などに代表されるように、狐にまつわる伝承は多く見られます。また、神仏に近い存在であると考えられても来たようです。

一方で、タヌキは、畑などの農作物を荒らすの

で、嫌われたのかもしれないね。

ここにきてまた、「新型コロナ蔓延防止等の措置」がとられることになりました。それによって図書館の利用ができなくなり、原稿書きやその整理などで図書館を利用することが多いので、正直困ってしまっています。そんなわけで、狐狸妖怪についての資料調べが出来なくなってしまったのは痛いです。

この新型コロナウイルスは、どうも従来の考え方では対処できない種類のウイルスなのではないかという気がします。爆発的な感染力になすすべがないというのが現状だろうと思います。

それでも、物語を書く試みは、この先も続けていきたいと思っています。

主題からは外れてしまっていますが、近年IT技術が急速に進歩して、ここまで進んできました。そうしたなかで、スマホの果たす役割がどんどん大きくなってきています。

単なる通話用の通信手段としてだけではなく、映像などを自由に送ることができるようになって、その利用範囲が大きく広がりました。様々な情報を一度に大量にあらゆるところに送ることが可能になりました。画面にタッチするだけで、瞬時に答えが出てきます。

その功罪はあるでしょうけれども、その影響力の大きさからいっても、スマホ抜き社会はもはや考えられなくなったと言つてよいと思います。

買い物一つをとってみても、スマホを使った注文や金銭の支払いなど、人々の社会生活に、大きな変化をもたらしました。

いまさらですが、スマホの社会的な公器としての役割を考えると、私企業がその運営にあたるということは問題があると思います。公共性から考えてみて、今の高額な利用料金はもっと安くするべきだろうと考えています。少しでも多くの人が、この利便性に容易く参加できるようにするべきだと思います。

私企業が独占するようになってしまえば、そこに金銭的利害が発生して、一部の限られた者だけが得をするという歪んだ方向に走ってしまう恐れがあります。

そうなってしまうためには、国がすべてのスマホ機器を無償で支給して、国民すべてが無償で使えるようなシステムにしてもいいのではないかと思います。そうすれば、煩雑な事務手続きなども省略できるでしょう。

せっかく生まれたこの便利なものを、有効に活用していくべきです。

多くの人が、インターネット空間からもたらされる情報に頼るようになってるのが現実でしょう。その中に含まれている、フェイクニュースによつての弊害があることが指摘されています。それが本当のような嘘だから、なかなか始末に困ってしまいます。

罪のない冗談ならいいのですが、匿名による無責任な拡散は、まともな論議を壊してしまうのでよくないと思うのです。

フェイクニュースの排除を、もっと強く押し進める必要があると考えています。この点是对応が遅れています。

スマホの中の、対話形式のアプリケーションに参加してみると、その発言の中にしばしばこのフ

ェイクニュースの影響が見て取れます。

新型コロナの大流行によつて、自宅から出られなくなった人が増えてしまったものだから、こうしたコミュニケーションサイトが日に日に増えて繁昌しています。

また、引きこもりによつて孤立している人たちが、こうしたインターネットのコミュニケーションサイトにならば参加しているという事実もあります。

今の時点ではまだまだ少ないでしょうが、何年か先には間違いなく訪れる、アフターコロナの時代には、スマホを使った新たなもの、新たな文化が生み出されることを期待します。

一年で今が一番寒い時期です。新型コロナの終息が一日も早いことを祈る日々です。

風と共に 《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「秩序」

日々日中の陽射しが暖かくなってきましたね。

世界の情勢は未だ良いとは言えませんが、慣れてはいけませんが、慣れてきてしまっている様に感じます。

今回は秩序について、
突然ですが、ここ最近特に、いや、ここ数年で徐々

に感じてきていますが、世の中おかしくありませんか？

勿論おかしい所は沢山ありますが、世間のニュースでは親が子を、子が親を手を掛けたり、正しく生きようとする者に必要以上の制裁を加えたり、ゲームの様に命が扱われている様に感じてなりません。

まさに秩序などそこにはありません。

自己主張ばかりで和を保とうとする気配すら感じ取る事が出来ないのです。

これも一つの進化の過程なのでしょうが、まるで理性を失った動物が増えて来ている様ではないでしょうか。

本能はどなたにもあります、ただ理性を失い思うがままに行動しては、秩序など生まれる訳ありません。

情報は容易く手に入る時代です、しかしそれが正しいのかどうかを検証する動きは小さく、それが正しいかどうかではなく、面白いかに人になるものかどうか、そればかりで本当の事など注視されないのです。

メリットデメリットはありますが、デメリットの方が大きく上回っている様に感じています。

話を戻しますが、世間のズレの原因は必ずあるはずで、根底を覆さない限り、今のおかしな状況はこのまま続いてしまします。

社会通念、一般常識が、今や通じない時代に変化してきています。

当然の事です、他人に危害を加えてはいけない、迷惑をかけてはいけない。

皆さんはどう思いますか？

他に人が少ないからと、電車の椅子に横になり、注意を受ければ逆ギレする、「何がいけないんだ」と。

車掌さんも、公共の場所なのだから、家の中の様にくつろぐんじゃないと、ハッキリ言ってしまうば良いのに、ゴニョゴニョと口籠もり言い返せない。どうして???

車内で喫煙してはいけないのに、注意した人間が重症を負い、周りのその他大勢は助けることすらしない、加害者は正当防衛だとの外れなら見解を晒す始末。

そのニュースを受け、一部のSNSでは、「弱い人間なんだから、最初から大人しくしていれば良いんだ」等と、私では考えられない様な他廃主義を恥ずかしげもなく、主張する第三者。

誰がどう取り締まる？

人それぞれ状況は違いますが、他人には触れて欲しくない言葉を投げかけられて、カッとなつて簡単に殺めてしまう。

理性は？秩序は？どうなっているんだ。

前段でも述べましたが、昔から少なからずあったのも事実ですが、ある頃を境に一気に加速してい

る様に思えます。

とどのつまりはそういう事です。

家の戸締まり、夜間の外出、人気の少ない場所、普段から特に、家族や親類、友人達には十分に注意して過ごして欲しいなと思います。

少しでもトラブルに合わない様に、無秩序な世の中にあつて、理不尽な結果がついてまわる不可解な状況ですから、以下に自分自身を守っていくのか、これが大事です。

一筋縄には行きませんが、大きくズレてしまった行き先を元に戻すのは。

今までも何度か触れてきましたが、一人一人のほんの些細な優しさで良いんです。

難しいお願いではないんです。自分の出来る事だけでも良いんです。

他者への想い思い、この事だけでも大きく変われるはずですから、いつかそんな秩序ある明日が来る事を祈って。また来月お会いしましょう。



【風の談話室】 《読者投稿》

三・五・七・九重塔

京都府木津川市 今井 直

鬱蒼と茂る老杉の木立に囲まれ、羽黒山五重塔は小雨に煙っていた。これまで見てきた優雅で華美な五重塔とは全く異なる。厳かな空気が漂う森の中で長年の風雪によって木肌が風食し、それは無骨で素朴な佇まいであった。厳しい修行を積む修験者とはこのような姿なのかと想像が膨らんだ。私は古塔の存在感に圧倒されて、暫し時を忘れた。

仏塔は元来、仏舍利（『釈迦の遺骨』）を祀るための建物で、物見やぐらではない。江戸時代以前に建立され現存する五重塔は22基あり、そのうち9基が国宝に指定されている。最も古い斑鳩・法隆寺の五重塔（約32㍎）は、7世紀後期の建立である。総ヒノキ造りで千三百年後も気品を保ち、凛として建っている。中門を背にして眺めると、正面奥に講堂、右手に金堂、左手には五重塔、しかも金堂はちょうど塔の半分の高さ、絶妙のバランスだ。最も高いのは京都・東寺で約55㍎、奈良・興福寺は約51㍎で二番目だ。

そして三番目は約46㍎、京都・法観寺五重塔。「京都にそんなお寺ある？」と言う人が多いかもしれない。清水寺参詣の際に、産寧坂（『二年坂』）あたりで誰しも目にする「八坂の塔」だ。寺の名前を知らなくても、「そうだと京都にいま！」が実

感できるランドマークである。法観寺には、風情ある五重塔の他にインスタ映えする建物がないから、「八坂の塔」が通称となっている。

一方、屋外に建つ最も小振りな塔は、室生寺の五重塔で約16㍎。石段の下から見上げるからそれほど小型とは思えない。女人高野の寺らしく、檜皮葺・丹塗りの優美で可憐な姿である。

屋内では元興寺に5.5㍎、海龍王寺（奈良市）に4.1㍎の素晴らしい五重小塔がある。実物の10分の1のスケールで作られたミニチュアだ。当初より屋内で安置されたため、保存状態が極めてよく、天平時代の建築技法を今日に伝えており、工芸品ではなく「建造物」として国宝に指定されている。

私は興福寺五重塔こそ立派で最も美しいと思うが、便秘改善サプリのCMと同様に、それは「個人の感想」にすぎない。法隆寺と瑠璃光寺（山口市／約31㍎）、醍醐寺（京都市／約38㍎）の五重塔が、日本三名塔だと一般に言われている。誰がどういう基準で選んだのか分からない。名前が挙がった上記3基について異論はないが、咲き匂う花のような室生寺五重塔などは深く心に刻まれている人も多いだろう。

斑鳩法起寺の塔（約24㍎）は、三重塔では日本最古だが今もたいへん魅力的だ。薬師寺の東塔・西塔（共に約34㍎）は、特徴ある裳階がついた三重塔。本建ちを風雨から守るため各層の軒下にある庇だ。五重塔にも法隆寺と海住山寺（京都府木津川市）の2基には、初重（『一階』）に裳階がある。

海住山寺の五重塔は高さが約18㍎で、室生寺の塔に次いで二番目に小さいが、鎌倉時代の傑作と称賛される国宝である。

五重塔はいわゆる五階建てではない。二層より上には床がなく、吹き抜けがずっとつぺんまでの木造一階建て（『平屋建て』）だ。誰も内部に入れないから、遠くからでも拝めるよう高層の建物になったと言われる。

心柱が中心を貫通しているが、それを囲う四隅に配される柱が四天柱、その外側に12本の側柱が立つ。塔礎石は心礎を含め計17個となる。四天柱と側柱の上部を肘木が繋いでいる。柱の上に渡した横木で、上からの重みを支える働きをする。初重を真上から見ると「囀」の字の形をした正方形の水平木組みだ。このような筒状の箱型構造物をその上にひとつひとつ順々に積み重ねる。ご馳走を盛る重箱を連想すれば分かりやすい。しかも各層は互いに接合されないらしい。上層からの重量だけで安定して立つとは、信じがたい構造である。

唯一の通し柱とも言うべき心柱は、いわゆる「大黒柱」の役割は全く果たしていない。仏塔のシンボルである相輪（『九輪』）を支えているのだという。再建された薬師寺西塔の相輪は3トもあり、それほどの重量を支えるには丈夫な木材が必要だ。雨水が入らないよう最上層部の屋根とだけ接合していると聞く。しかし、木材は歳月と共に乾燥し収縮する。木の繊維は縦方向だから柱は余り縮まないが、桁や梁や肘木など横材は縮みが大きい。

瓦屋根だけでも百数十トというから大きな荷重がかかり、年月が経つと大きな歪みが生じる。心柱が屋根を突き抜けないよう、心礎から浮かせて吊り下げたりする。

天を衝く塔が落雷により焼失することがあっても、地震や強風により倒壊することは滅多にない。これは五重塔の構造と深く関っているのだが、耐震性については「心柱振動吸収説」や「門(かぬき)説」(⑩地震が起きた際、心柱が観音開きの扉を固定する「門」の働きをするという説)など、まだまだ議論は尽きない。

古代には七重塔や九重塔まで建てられていたことが記録されているが、現存するものはない。《全国に命じて、それぞれ七重塔一基を謹んで造営し(中略)七重塔を持つ寺は国の華であり、必ず良い場所を選んで永久に存続すべし》——聖武天皇による『国分寺建立の詔』(741)は、凶作疫病を防ぎ、五穀豊穰、国家安穩を祈るための国家プロジェクトであった。総国分寺東大寺では、大仏殿をはさんで二基の七重塔が東西に並び立ち、高さはいずれも96メートルほどあったという。さらに上野・下野・上総・相模国などでは、塔址の礎石の配置や規模から、高さが60メートル以上の塔が建っていたと推定されている。

さかのぼって飛鳥時代、藤原京・飛鳥には、法興寺・大官大寺・薬師寺・川原寺と、格式の高い四大寺があった。法興寺(別名飛鳥寺)は蘇我馬子が建立したわが国最初の本格的伽藍を備えた

仏教寺院だった。造立にあたっては百済の技術や渡来人が導入され、中金堂・東金堂・西金堂が五重塔を取り囲む「一塔三金堂」式の伽藍配置であったという。

舒明天皇が発願した百済大寺が飛鳥に移転して、天皇の寺という意味の「大官大寺」に改称された。東西144m・南北195mもある回廊で囲まれ、講堂は正面九間・側面四間、塔は方五間もある飛鳥最大の寺院だった。(⑪古建築では柱と柱のあいだの数を「間」と言い、「方五間」とは「一辺の長さが柱6本・間が5つある方形」を指す。仏塔は「方三間」が基準だった)塔の基壇は一辺が約35メートルの正方形、塔跡も一辺15メートルの規模である。因みに塔の初重の一辺の長さを他の塔と比較してみた。《東大寺七重塔・約16メートル、相模国分寺七重塔・約11メートル、東寺五重塔・約9.5メートル、興福寺五重塔・約8.3メートル、法隆寺五重塔・約6.3メートル》これらの数値からすると『扶桑略記』に記された「九重塔」が真実味を帯びる。だが塔の高さまで正確には分からない。おそらく東寺五重塔より遥かに高く、東大寺七重塔に匹敵する96メートル級のスカイツリーだったと推測がつく。

大官大寺塔跡からは、真正面に天香具山が迫り、その右手奥に三輪山がくつきりと見える。柿本人麻呂が「大鳥の羽がひの山」と詠んだ(万葉巻二二二三)山並みである。神が鎮まる山を遠望できることを意識して、この地に荘厳な大寺院を造営したとみるのは穿ちすぎだろうか。

大官大寺と薬師寺は、藤原京の左京と右京に相対して華麗な伽藍を競っていた。やがて平城遷都(710)にもなつて、飛鳥の大寺院も平城京へ「遷寺」する。移転先は藤原京の位置を引き継ぐように、大官大寺は左京六条に移つて「大安寺」と改称され、薬師寺は右京六条に建設された。法興寺は外京(⑫平城京東部に張り出した地域)に移転して、「元興寺」と寺名を改めた。

川原寺だけが飛鳥に留まったのは、斉明天皇ゆかりの寺院だったからと言われている。飛鳥・藤原の地に残った元の伽藍は、「本薬師寺」・「飛鳥寺」と呼ばれてその後も紆余曲折を経たが存続し、今日まで法灯を守り続けている。現在の飛鳥寺本堂が建つ場所は法興寺中金堂の跡地であり、本尊の釈迦如来像(「飛鳥大仏」)も大きく補修がされているが、飛鳥時代から同じ場所に安置されている。しかし、大官大寺は平城遷都の翌年に藤原京の大火で焼失し伽藍は失われた。それでも明治中頃までは金堂跡と塔跡が残っていたが、桓原神宮造営の時に礎石はすべて石材として運び去られた。現在その面影を伝えるものは、水田の中にポツンとたたずむ「史蹟大官大寺址」と「大官大寺塔址」の石碑二基だけである。

(参考資料 小川三夫著『宮大工と歩く奈良の古寺』)

寒い日が続いています。仕事をするため外に出るのに・・・勇気がいる？～したら、～を見たら、～の後に、躊躇いばかりで、動きが鈍くなりがち・・・！

・近くの溜池は今日も全面凍結・・・。それにしても、最近吹く風は猛烈・・・。強風を通り超して、既に突風状態。そのお蔭で、作業場の屋根が度々壊されている。風が収まっている日は、早速修理です。覚束ない梯子乗りを、ヒヤヒヤしながら見ています。私は、少し暖かくなつて来たので・・・？

・月1回開催の岩間駅前バザール(骨董市)で、竹の背負い籠を買った。買おうかどうか何度も行ったり来たり(右往左往)思い切つて、いくらですか？”と聞いてみる。暫く考えていた、骨董屋の主人・・・千円でいいや！気が変わる前、早々にお買い上げした。ご近所さんから頂いた切り花を飾ってみた・・・なかなか素敵、満足まんぞくの日でした。

・全世界、全日本を襲っている、COVID-19(オミクロン株)が、石岡市内にもジワジワとやっけて来ている。水曜日は竹細工の日だが用心して休みに・・・。そんなわけで朝から暇が出来たので、急遽味噌仕込みを始めた。いつも野菜を届けてくれる、有機農家の大豆五キロ、と地元の東屋さんのこうじ五キロを仕込んだ。ひと息ついていると

竹細工の師匠が、にしん漬けと甘酒(やがて、濁酒になる)を届けてくれた。手作りのにしん漬けでお昼ご飯美味しくいただいた。

下士官の手記 1 燕石(えんせき) 始めに

三回忌も過ぎたので、父の遺品を整理していると、箱の底から茶色に変色した沢山の紙の束が出てきた。読んでみると、誰かの手記を書き写した物らしい。ぼろぼろでいまにも崩れそうなものを、読み進めていくと、中々面白かったので、復元してみることにした。欠落したと思われる箇所は、復元してみた。

日にちが錯綜しているので、それをまとめるのはかなり時間が掛つてしまった。

所々辻褄が合わないのは、書いた人の記憶が曖昧になっているからだと思われる。更には、原因不明の病にかかったという事だから、それが原因となつて、記憶に障害が残ったのかもしれない。幾枚かの色あせた写真も一緒に残っていた。

父は旧日本軍の将校だったので、おそらくはその当時の部下の残したもののだろうと思われる。関係者はすべて物故したと思えるので、公開することにした。

・旧仮名遣いや旧漢字は今のものに改めた。原文はカナ書きで、読みにくいので平仮名に直した。
・軍用語や、もう使われなくなった言葉も可能な限り解説を付けた。

・基本的に原文に忠実に復元したが、一部欠けているところは、推察して補完した。
・人名は、プライバシーに関わるので、仮名とした。

・小見出しは、わかりやすいように私がつけ加えたものです。

・差別語などが頻発しますが、当時のものなのでそのままとしました。

この覚え書は、私の死後、速やかに焼却してほしい。

長い月日がたつたとはいえ、中国大陆でわたしが行った数々の蛮行・悪行が人に知られては、と思うと震える心地がする。

大陸での日々 1 行軍

通信學校の教育隊で訓練中に、上級司令部から出動命令が発令されて、大陸に出撃することになった。

本州南部にある××港から、一等輸送艦××丸に乗艦した。

×月×日。

我々兵隊は、狭い階段をいくつも降りたところの、船底の一番下に詰め込まれた。ほとんどの者が、ひどい船酔いに苦しめられた。わたしも食べべたものが皆出てしまい、しまいには、黄色い胃液しか出なくなった。室内は換気も悪く、糞尿や吐いたものなどで、息もできないほどの悪臭が充満していた。上陸を告げられて、船倉から甲板に出た時は、正直なところ空気がうまくて、それこそ生き返った気分になった。

×月×日。上陸1日目。

×日のあいだ、この大型の輸送船に揺られて、大陸の××港に上陸した。

生まれて初めて、他所の国へ来たのだが、自分のような田舎者にとっては見るもの聞く物が、今まで見たこともない珍しい物ばかりであった。上陸した所は大陸の玄関口の一つで、東洋でも一、二を争う大きな商都である。日本の商店やら飲み屋の看板も数多くあった。日本のビール会社や菓の広告まであった。

街を行きかう人の数も多く、聞きなれない言葉が飛び交っている。西洋人のような人も多く歩いている。

通りの所要所には、小銃に着剣した兵士が立って警戒している。

次々と接岸する大きな輸送船からは、トラックや資材が降ろされ、兵士らがそれに続々と乗り込んで、車列を組んで出発してゆく。はるか遠くに砲声が聞こえて、いよいよ戦場に来たなという気がする。全員が整列し、部隊長からは訓示がある。

連絡の手違いがあつて、大事な通信機材がどこかに紛れてしまった。丸一日、手分けして広い埠頭を、あちこち機材を捜し歩く。

途中で憲兵隊の一団とトラブルになった。(この詳細は後で述べる。)

×月×日。上陸2日目。

輸送隊のトラックがないということで、まる一日無駄足になる。

結局、トラックの手配がつかず、午後から歩いての移動となった。上陸そうそう、機材の紛失と言いい、輸送の手違いと言いい、世界に誇る帝国陸軍の規律は、一体どうなつてしまつていのだとい

う想いがある。

×月×日。上陸3日目。

隊列を組んで行軍して、町の郊外へ出たところで、数発の銃弾が飛んできた。みな、大慌てで地上に伏せたり遮蔽物に隠れたりした。

ここで運の悪いことに、分隊長が被弾して戦死してしまつた。

「パン」という乾いた音がして、自分のすぐ前にいた分隊長が、映画のスローモーションのようにくずおれた。貫通した傷からは、夥しい血しぶきが噴き出した。目の前の惨状に、一同なすすべもなく呆然とするばかりだつた。近くの部隊の衛生兵が駆け寄つてきたが、すぐに首を振つて行つてしまつた。他にも数名の負傷者が出た。近くに狙撃兵が潜んでいたらしい。戦死者を目の当たりにするのは勿論初めての体験だつた。

ヒトの身体からあれほど大量の血が流れ出るとは思わなかつた。

×月×日。上陸4日目。

先遣隊はもう遙か先を行つていゝ。結局トラックは手配がつかず、奮力搬送になる。数頭の牛馬が手配されたが、とてもこれでは足りない。

重い通信機材を担いでの行軍は辛い。やつと上等兵になつたばかりだが、歩兵部隊と一緒に前線に向かう。通信隊というものは本来なら後方勤務だが、一日も早く追いつかないと作戦にも支障が出てくる。

分隊長が、上陸直後の小戦闘で、流れ弾に当たつて戦死してしまい、いきなり伍長勤務上等兵として一個分隊を預けられることになつた。古参兵もいたが、同じ時に負傷して、病院送りになつたため、最先任ということで、分隊長となつた。こ

うして、初めての部下を持つことになつた。

分隊長になつて一番最初にした仕事は、分隊長の戦死の報告書の作成だつた。目の前で、銃弾に当たつて人間が死んでゆくのを見てしまつた。戦場での人の死は当たり前だが、さつきまで快活に会話していた人間が、つぎには物言わぬ骸になつてしまふ。日常的に人の死が当たり前のようになつていつて、感覚がマヒしてしまふ迄にはいくらかかからなかつた。

×月×日。上陸5日目。

いくら歩兵部隊であるとはいへ、来る日も来る日も、土埃にまみれながらの行軍に次ぐ行軍だ。物見遊山の気分はすっかりどこかへ飛んでいつてしまい、さすがにうんざりする。こつちの隊列のわきを、兵士を満載したトラックが砂埃を巻き上げて、次々に追い越してゆく。トラックの側面には、日の丸とともに、

「撃チテシヤマン、皇軍〇〇部隊」勝利！△△部隊「〇〇、一番乗り！××部隊」などと勇ましい文言が大書してある。家々の前には、日の丸と、日章旗を組み合わせて掲げている。悲しい庶民の知恵なのだろう。

×月×日。上陸6日目。

行軍中にまたもや攻撃を受ける。小さな部隊なので、よけいに狙われるのだらう。通信隊だから、武器と言つても小銃ぐらいしか持つていない。それも半数ほどしか持つていない。全員に伏せるように言う。道路わきに伏せる。機関銃の弾が、あたりにぶずぶずと突き刺さる。幸い負傷者もなく、救援に駆けつけてきた部隊が一斉に射撃を始める。と、敵はいつの間にか姿を消した。これ以降、道路わきを歩くようにする。

×月×日。上陸七日目。

道端で食料を売っている店があった。いつ戦闘が始まるかわからないのに、どこにも遅しい人間がいるものだ。さっそく買ってみることにした。値段は高いが仕方がない。手持ちの金をほとんど使ってしまった。

×月×日。上陸八日目。

先を急ぐあまり、行軍の速度が速すぎて、だんだんと輜重の糧食の補給が追い付かなくなってきた。一週間分の食料を支給されたが、こここでなくなってしまった。新米指揮官の悲しさでこうした時の対処法もわからない。小隊クラスになればベテランの軍曹などがうまくやるのだが。

こんな時は、糧食・補給の届くまでゆつくりと行軍を続けなければならない。先行する兵科の部隊が優先であるために、こちらは後回しとなっている。

兵站の曹長に掛け合っても、相手にされない。数段格下の若い新米伍長など、小僧扱いである。

(いつの間にか正規の伍長になっていた。ついこの前までは、上等兵だった。当時まだ、兵長の階級がなかったから、いきなり下士官の伍長となった。)

×月×日。上陸九日目。

実戦経験は全くないので、何をしてよいか皆目見当がつかず、分隊の古参兵にあれこれと教えてもらう有様だ。途方に暮れてしまう。

教官でもあった上官は、先発隊と一緒にトラックで遙か先に行ってしまった。

×月×日上陸10日目。

道の到る所、死体が転がっていて、腐敗して悪臭を放っている。バラバラになった死体には真っ黒にハエがたかっている。焼け焦げて真っ黒にな

った民家が道の両側に立ち並んでいる。住民たちの姿は、一人も見えない。そっちこっちに塹壕が掘ってあって、今は無人となっているが、様々な残骸が散らばっている。

×月×日上陸11日目。

数日降り続いた雨で、黄土は泥濘となり、膝まで沈んでしまう。大陸だけあって、雨の降り方すらおぞましく。ところどころの道が、見る間に川のような濁流となってしまつて行軍がはばまれる。工兵隊がふんどしひとつになって仮橋を掛けているが、すさまじい勢いの濁流に、たちまち押し流されてしまう。輸送トラックも、泥濘にはまって立ち往生している。

軍靴などは長いこと水に浸かったもので、靴底がはがれてしまった。まともな靴を履いている者はいない。背囊の中も水浸しで、乾いたものはない。携帯口糧もついになくなってしまった。塩をいくらか持っていたが、溶けてなくなってしまった。いた。白い飯がつくづく懐かしい。

分隊の半数は、通信教育隊から上がってきた若い連中だ。完全武装だから、背囊も重い。それに重い通信機材も背負っている。

新兵たちは、連日の過酷な状況に完全に参っている。早くもへたばり始めた。ベテランの隊員は、要領よく雑務をこなしている。

×月×日。上陸12日目。

一人の古参兵に二人ばかり新米の兵士をつけて、食料の調達に当らせた。行李の中から、軍票を出して持たせた。軍票は見たところ、内地の紙幣とさほど変わらないが、聞くところでは、中国人は喜ばないということだ。それはそうだろう、見知らぬ他国の者が、見かけない紙幣を使い、片言で

交渉してもとても相手にはされまい。物々交換か、脅し取るしかないだろう。

×月×日。上陸13日目。

食料の調達に向かった兵は、中国語が話せたので、何とか食料を仕入れてきた。

その兵の話によると、先遣隊と前後して上陸した陸軍兵が、このあたりでかなり強引な徴発を行ったらしい。中には女を強姦した兵士もいたということだ。部隊長の名前で、略奪、暴行はならんとたびたび通達が出ていたが、それはたてまえだけであり、第一線の兵士にまでは徹底していない。

このあたりの住民の大半はとくに逃げてしまっていて、ようやく見つけた人家にも、譲ってくれる食料など残ってはいない。奇跡的に徴発を免れた家があり、拝み倒してようやく手に入れたということだ。

腕時計と万年筆が、物々交換の商品となった。私物の行李が届いたので、中にあった万年筆を渡した。腕時計は一つしかないのに、諦めて貰うしかなかった。

若い兵隊は、久しぶりの御馳走にすっかり大喜びである。行李の中のキャラメルと、金平糖を分けてやった。

「分隊長殿は、優しいであります。」

これに対して、

「分隊長、ここで新兵を甘やかしてはいけませんよ。甘く見られたら、いざというときに命令を聞かなくなりますから。」

こう言ったのは、前の大戦の時、青島にいたという触込みの古参兵の一人だ。前の大戦はふた昔も前の出来事なので、この経歴はどうも怪しいものだ。古参兵の中には、こうしたはったりを平気

でついて、廻りの者を威嚇する者がたくさんいる。
×月×日 上陸14日目

焼け残った民家に泊まる。夜中に違和感を感じて起きると、夥しい数の南京虫が這い回っていた。
×月×日 上陸15日目

予定を大幅に遅れてやつのこと、目的地××に到着した。

ここは、開けた平坦地で、少し隆起したなどらかな丘になっている。付近には小さな集落がいくつかある。

近くの師団本部に到着の申告に行く。受附の中尉から、到着の遅れを叱責された。そういわれても、とっさに返す言葉がない。

「大至急通信所を開設せよ。」という。

休む間もなく、早速手分けして、機材の組立、兵舎の建造にかかる。その前に、急いで周囲に塹壕を掘らなければならない。

×月×日

雨と湿気の所為か、通信機の機能が悪くて、思ったように通信ができない。初年兵の訓練も兼ねて、丘越えの通信連絡を試みたのだが、信号を幾らも拾えなかった。古参兵たちが新兵の尻を叩いて、何とかしようとするが、無線機が満足に使えないのではどうにもならない。

×月×日

思いついて、有線での訓練に切り替えてみる。此の時の訓練が、後になって役立つことになった。時折、前線からの交代兵が立ち寄り、前線の様子を伝えてくれる。

×月×日

どこかの通信分哨が襲われ、戦死者も出たというのを聞いた。通信隊は戦闘部隊ではなく、装

備も小銃が少しある程度なので、もしも襲われたら一たまりもない。

×月×日

古参兵の一人が迷子の少年を連れてきて、「うちの分隊で使ってくれないか」という。

いつぞやの時計の兵がそう言うので、断りきれない。取敢えず、当番兵とした。正規の兵士ではないので、員数には入らない。この少年兵・林には馬の世話と、長靴の手入れを命じた。日本語はかたことだったが、見る間におぼえてしまった。初年兵たちとも年が近く、いくらしないうちに、みんなから弟のように可愛がられた。

敵前上陸を果たした、という功績で小さな勲章が貰えた。人事係の准尉あたりが申請するのだが、ここにはいない。おそらくM大佐あたりが、裏で動いたのだろう。伍長昇進も、大佐の意向が働いたのかもしれない。

戦況は、もはや膠着状態となっている。トラックに載せられて、後方へ運ばれる負傷した兵士が目立ってきた。白木の箱に入った千sぢ社の遺骨も目にする機会が増えた。

無線機の調子もようやく回復して、各方面の情報もようやく届くようになった。

前線では激戦が続いているらしく、近くのクリークには、双方の戦死者が流れ着く。

早速、元の教官殿と無線で話してみた。それによると、分隊長も伍長勤務も、この教官の差し金らしい。気心の知れた自分を、手元で使いたかったのだろう。

下士官となると、軍刀を下げ、腰に拳銃という格好になる。靴も長靴だ。

(続く)

茨城県の難読地名とその由来 (20)

木村進

国の付く地名

国生 【こっしょう】 常総市

国長 【くにおさ】 常陸大宮市(旧緒川村)

国府田 【こうだ】 筑西市(旧下館市)

★国生【こっしょう】 常総市(旧石下町)

「角川日本地名大辞典(茨城)」には「古くから『将門記』の記述内容と式内社である桑原神社の存在から下総国府の所在地であったという伝承が根強く、地名の由来も国庁の転訛したものとする説がある(下総国旧事考)」と書かれている。

国庁(こくちよう)が国生(こっしょう)という読みは似ているのでやはり転訛ということなのだろうが、「生」はやはり「のある場所」などという意味だと思われず。

「にゅう」と読まずに「しょう」と読ませたのには「国庁」が意識されたというのはあるのかもしれない。やはり場所柄として、平将門が新たな国を宣言して、国府として定めたという説にも説得力がある。

★国長【くにおさ】 常陸大宮市(旧緒川村)

クニは開拓された土地、オサには長い細長い谷という意味があり、地名は細長く狭い谷間の開拓地に由来(おがわの文化)とある。

★国府田【こうだ】 筑西市(旧下館市)

地名は往昔常陸国府の神饌田(しんせんだ)があったことに由来するという(杉山私記)

神饌田(しんせんだ)とは神社や神棚に供える供物を作る田のこと

昔はこれらのコメを作っている田の税を免除（全部または一部）するという事が各地で行われていた。

国府を「コウ」と読む地名

- ・茨城県筑西市国府田（こうだ）
 - ・栃木県栃木市国府町（こうまち）
 - ・栃木県小山市上国府塚（こうづか）
 - ・千葉県市川市国府台（こうのだい）
 - ・千葉県茂原市国府関（こうせき）
 - ・千葉県いすみ市国府台（こうのだい）
 - ・千葉県長生郡長柄町国府里（こうり）
 - ・神奈川県小田原市国府津（こうづ）
 - ・静岡県磐田市国府台（国府台）
 - ・愛知県豊川市国府町（こうちょう）
 - ・愛知県稲沢市国府宮（こうのみや）
 - ・三重県鈴鹿市国府町（こうちょう）
 - ・三重県志摩市阿児町国府（こう）
 - ・大阪府藤井寺市国府（こう）
 - ・鳥取県倉吉市国府（こう）
 - ・徳島県徳島市国府町府中（こくふちようこう）
- もちろん「こくふ」「こくぶ」という読みのところも数多くある。

百目鬼【おめき】【ぶめき】

- 百目鬼 【ざわめき】 石岡市（旧八郷町） 柿岡地区
- 百目記 【ざわめき】 石岡市（旧八郷町） 葦穂・鯨岡
- 百目ヶ崎 【ざわめき】 石岡市（旧八郷町） 葦穂・鯨岡

この「百目鬼」は恋瀬川岸の教筆の小字名で、数は少ないがこの「百目鬼」と書く地名は、山間地の町村や海岸の町村などに散見されます。山間地では川の瀬の早い流れの川岸に付けた地名で、

海岸では、激しい波の音が聞こえる処などに付けられた名前といえるでしょう。

サワメキ・ザワメキ・ドドメキなど水音をそのまま言葉としています。

漢字で表記する場合には、百目鬼・百目記・澤目木・堂目木・洞目気などの漢字で表記されている。また、クルメキと同じ意味として来女木・久留米木として、激しく流れる水が、渦を巻いて流れる様を表現しているという。（「八郷の地名」より）

- ・山形県山形市百目鬼（どめき）、百目温泉（どめきおんせん）
 - ・青森県上北郡横浜町百目木（どめき）
 - ・宮城県気仙沼市百目木（どうめき）
 - ・宮城県加美郡加美町百目木（どうめき）
 - ・福島県二本松市百目木（どうめき）
 - ・千葉県袖ヶ浦市百目木（どうめき）
 - ・宮城県大崎市鳴子温泉沢目木（ざわめき）
 - ・栃木県 百目鬼川（どうめきがわ）
- 「百目鬼」で全国では「どめき」または「どうめき」と読むところが多い。
- 石岡の地名では「ザワメキ」となっているが、今はほとんど消えてしまっている小さな場所につけられた地名のようだ。
- 東京の「等々力（とどろき） 溪谷」なども同じように水の流れる音が語源とっていいだろう。

部の付く地名

茨城県に「部」と付く地名（旧大字のみ）はたくさんある。主なものを記します。

★部のつく地名

- 田土部 【たどべ】 土浦市
- 五部 【ごへい】 古河市
- 部原 【へばら】 石岡市
- 部田野 【へたの】 ひたちなか市
- 高部 【たかぶ】 常陸大宮市
- 門部 【かどべ】 那珂市
- 谷部 【やべ】 筑西市
- 部室 【へむろ】 小美玉市
- 部垂 【へたの】 常陸大宮市
- 谷田部 【やたべ】 つくばみらい市（茎崎町・谷田部町）、下妻市、神栖市波崎、茨城町など

地名に出てくる「部」は「ぶ」というのは1件のみで、あとは「へ」「べ」「へい」「へた」などと読ませている。この読みは「部屋」「へや」などという語は普通に使われるが、最近の都会地名からはほとんど消えてしまっていて、いかにも田舎臭く感じる地名になっています。でもこれは昔から伝わっている古い地名だという証拠でもある。

古代にさかのぼると、忌部氏（いんべうじ）、斎部氏（いんべうじ）、物部氏（もののべうじ）、卜部氏（うらべうじ）など「部（べ）」と付く氏族はかなりの勢力を持っていたことがうかがわれます。またヤマト朝廷では部民制（べみんせい）という体制が作られ、「職業部（しよくぎょうべ）」と呼ばれる、職業名に「部」をつけた名称がつかわれていました。

そしてこれらの職業に従事した人たちが集まった場所に「部（べ）」という漢字が地名につけられたと思われる場所が多くあるようです。

それでは「部」が付く地名を一つずつ見ていきましょう。

(1) 田土部【たどべ】 土浦市(旧新治村)

桜川中流左岸の沖積地にある。室町時代ころから見られる古い地名で、稲荷古墳・明神古墳群などがある。(角川日本地名大辞典)

(2) 五部【ごへい】 古賀市(旧三和町)

角川の日本地名大辞典ではこの地名の読みは

「ごへい」である。また、旧三和町の飯沼干拓地北部西岸台地にある。結城市七五三場(しめば)とは隣接する。地名としては戦国期すでにその名前がある。と書かれている。また平凡社の「茨城県の地名」(日本歴史地名大系8)でも読みは「ごへむら」である。また同書の中で、元禄郷帳に「五編村(ごへむら)」と書かれているとある。また

Wikipedia には「近隣に「御辺」(ごへ)という地名があるため便宜上隣接する地名を付け「諸川五部」と呼ばれることがある」とある。また縄文遺跡「本田遺跡」があり、縄文時代の堅穴住居跡なども見つかったという。名前の由来はわかっていないが、高句麗五部(こうくりごぶ)(族)などの関連も考えられるかもしれない。水戸市と笠間市の境界付近両地域(旧内原町と友部町)に「五平」という地名があるが関連は不明。

(3) 部原【へばら】 石岡市

「八郷の地名」(八郷町教育委員会編)によると、地名の由来については台地の端というが、「へ・べ・部」は古代豪族の品部・部曲・職業部の住んでいた処の地名でもあり、この瓦谷から部原にかけの村境宇高芝には国府の国分寺・国分尼寺建立の際の瓦類製造窯跡があり、瓦谷には作業集落があったことなどから、律令制下官営窯があったと推定され、部の存在からの地名であろうともいう。と書かれており、古代豪族の「部」の住んだ地域

であることを考察している。

(4) 部田野【へたの】 ひたちなか市

平凡社「茨城県の地名」によれば、この部田野村は中丸川左岸の水田地帯と台地を占め、「和名抄」に「幡田(はた)郷」があり、・・・とある。また、この古代に幡田郷とよばれていたこの地域は、中世には「戸田野(へたの)郷」と記す資料が散見する。1193年以前は戸田野郷の主は石川家幹の次男で、のちの常陸大掾となった石川助幹である。とある。

即ち、部田野はその昔は「戸田野」と書いていたようだ。

(5) 高部【たかぶ】 常陸大宮市

「角川日本地名大辞典」によれば、「古くは建部・武部と称され、中世に高部となったという。地名は、タケⅡ武に通じ日本武尊(ヤマトタケル)にちなむという説もあり、軍事的部民である建部が置かれたともいわれる」と書かれている。

中世には高部氏が高部城を築城して佐竹氏の重要拠点となったと思われる。

また西野内和紙の生産が盛んに行われ、今も古い街並みを形成している。

人名の「高部(たかぶ)氏」のルーツは、この高部村とも言われている。

この高部から袋田方面(大子町)に行く峠は「タバツコ峠」という珍しい名前の付いた峠だが、地元町史などでは、親鸞の孫の如信(じよしん)がこの峠でタバコを吸ったなどの説明があるが、これもおそらく古代語で タワⅡ峠 (木がたわむ、実がたわわにみのるなどのタワ) 形状から来ているものと考えられる。

(6) 門部【かどべ】 那珂市

職業部のひとつであり、門部連(高皇産靈尊の子の安牟須比命子孫)の子孫が地名の由来と思われる。

(7) 谷部【やべ】 筑西市

「谷部」という人の名前も茨城県から栃木、埼玉、千葉などに多く、この名前のルーツはここ茨城県筑西市にあるといわれます。地名の由来としては、長谷部が略されて「谷部」になった説や、矢を作る職業にまつわるという説などがあるという。人の名前にはこの谷部をひっくり返した「部谷」という方がいて難読の名前で知られています。「とりや」と読むのですが「へや」と読む方もおられます。「服部(はっとり)」という名前で「とり」とも確かに読ませますね。

(8) 部室【へむろ】 小美玉市(旧美野里町)

角川日本地名大辞典では「巴川上流右岸に位置する。」「部」は戸・辺の意、「室」は山林・山野の意で、地名は当地が池花池とそれに続く湿地帯の山野であったことによると思われる(美野里町史編集資料)と書かれている。

(9) 部垂【へたれ】 常陸大宮市

久慈川中流右岸に位置する。戦国期に見える地名で、部垂城(へたれじょう)という城があった。馬場資幹の子孫の河崎頼幹が応永10年に築城したと伝わる。この頼幹の子孫はその後人見氏を称し5代に亘って居城した。

(10) 谷田部【やたべ】

茨城県の中にこの地名は多いが、現在の郵便番号簿地名からはすべて消えている。平安時代の「和名抄」にでてくる「八部郷(やたべのこう)」が地名の元になっている可能性が高い。

河内郡八部郷…つくばみらい市(旧谷田部町)あ

たり
那賀郡八部郷…水戸市平須・小吹町あたり…
茨城町谷田部
久慈郡八部郷…常陸大宮市西部から山方町南西部
現在の常陸大宮市八田が地名としての遺称

【御留川（おとめがわ） 便り】 伊東弓子



石岡地方のよもやま話

木村 進

(7) 府中六井

常陸府中(石岡)は酒の名所でもありました。そこには街を潤す豊富で良質な湧き水があったのです。そんな街中に昔から府中六井といわれる名井があり、それらを農薬の制限をしたり、眼の病

に効くとしての信仰などで昔から大切にしてきました。石岡には関東養老の泉といわれる「親は諸白、子は清水」という伝説が残されています。かつて、常陸府中(石岡)の町は清酒どころとしても昔から名高いところでした。清酒造りには良い水が必要で、湧水は大変貴重なものだったのです。鉄分も少なく、酒造りに適していたと言われています。

しかし、その泉や湧き水も、今では水量が大幅に減ったり、枯れてしまったりして面影も薄れてしまい、その場所もはっきりしないものもあります。また、これらの井戸(六井)も必ずしも六ヶ所とは限らなかったようですが、かつて栄えた府中(石岡)の泉を紹介しておきましょう。定説となっている六個の井戸は次の6つです。

『石井の泉』

・涼しさに千歳をかけて契るかな

石井の水の清き流れに

：石井の泉は若宮八幡宮の少し先を左に曲がった通り沿いに案内矢印があり、先に進むと住宅の裏側にある階段を下に降りた窪地に石の地蔵と看板が置かれている。



水は申し訳程度に流れているが、苔むした淀んだ水できれいとは言えない。昔は、目の治療にも効く清らかな水で、農薬が回り始めた時は、この泉の周りは農薬が禁止されたという。

『室ヶ井』

・びんずるの谷津に月さす室ヶ井の湧き出づる水の流れ清けれ

：この室ヶ井(室貝)のあった場所は6号国道の建設で道路の下に消えてしまいました。歌にあるようにこの湧き水のまわりがツルツル光ったような土の窪地であったという。石岡駅側から細い道を現在の6号を通り越して「平等寺」の方に行く途中にあり、写真集「いしおか昭和の肖像」には、昭和30年12月18日にこの室ヶ井の井戸供養が行われた写真が残されている。

6号国道バイパスが昭和36年に完成し、井戸は無くなってしまった。昔は、一日に七へん色が変わるほどの清井であったという。

また、この室ヶ井には景清(平家の猛者として歌舞伎でも有名です)がこの地で生まれ、この水を産水としたとの伝説が残されています。現在の貝地にある「平等寺」があった場所には昔、「国掌屋敷」という屋敷があり、近衛景清(藤原景清、平景清)がこの屋敷で生まれたとする話も伝わっています。

『野々井』

・故郷の野中の清水ぬるければ

物の心を知る人ぞ汲む

：国分寺町から笠間へ向かう通称「笠間街道」(旧355号線)が山王川を渡ったすぐ左側あたりにあったといえます。ここを流れる山王川は今で

は細い排水路のようになってしまいました。昔は川遊びなどができたという。

湧き水は、昭和50年に建てられた住宅の床下から湧き出していたといいます。北の谷のホチ水などといわれた井戸と同じかもしれません。野の井戸という名前から他の場所も候補に上がっています。

『小目井』

・見ぬ人は汲みて知るらん小目井の

清き流れの千代の行く末

：昔、外城といわれた城があった岡田神社が立つ台地（舌状台地）の先端の裾野の方に石碑が置かれている。

この水は眼病に効くと言われ、近隣から、また遠くからも参拝者がたくさんいたという。

昭和30年頃に六井も姿を消していく中で、この小目井も荒れ果てていましたが、これを有志で復活させてH21年4月に井戸（形だけで水はありません）と碑が立てられました。

『鈴負井』

・宮部なる瑠璃の光の薬とて

口にくくめる鈴負井の水

：場所は宮部下の先の田圃の中（355線バイパス（旧石岡有料道路）の旧料金所の近く）だ。ただこのあたりは今でも湧き水が数箇所あり、一か所に特定はされていない。また「鈴負井」は「鈴緒井」とも書いた。

この場所は、大変豊かな田圃があるが、石岡地区では海抜が一番低い低地で、この西側には恋瀬川が流れている。

恋瀬川の向こう側はかすみがうら市の志筑で、こちらには万葉集に歌われた「師付の田井」があります。こちらの井戸も歴史は古く今でもコンコンと水が流れ出ている。

『杉の井』

・今の世に塵もとどめぬ杉の井の

清きをおのがころもとな

：泉町の裏通り（ガラミドウ）から杉並の方に行く途中、常磐線の踏切を越えて、更に柏原池から流れてくる山王川を渡ったところに石碑が残されています。今では井戸は枯れてしまいましたが、江戸時代に水戸の殿様が江戸の行き来の時に、水戸街道沿いの杉並木の先にあった「茶屋場」でお茶をたしなむのに、この水が使われたといわれ、奥の小さな祠に「弘法大師」が祀られている。



【特別企画】

打田昇三の太平記（18） 巻第八

○山徒、京都に寄する（攻める）事

其の頃の京都近辺は合戦場と化していて、其れも守備に回る官軍の景気が良くない。其れを知った大塔宮は「何とかしなければならぬ！」と、密かに近辺の大寺院に屯する僧兵を味方に付ける

ことを考えて使者を送った。本来は合戦と無縁な筈の坊さんを巻き込むのは邪道なのだが：

僧侶と言っても中身が怪しい僧兵たちは朝晩のお勤めをする訳でも無い。暇を持て余していたところへ大塔宮から「戦争のお誘い」を受けたから断る理由も無い。山崎合戦から十日後の三月二十六日に本山の大講堂に集まり検討会を実施した。坊さんの集まりであるから小難しい理屈が飛び交うのは当然として、お経よりも合戦のほうが好きな集団は結局、幕府と戦う姿勢を打ち出した。そこで三千人の僧侶が数珠を投げ捨て、それぞれの寺院に帰って武装し、お経の代わりに軍歌を合唱し氣勢を挙げたのである。

中心となる連中は出陣の準備も早く整ったので二日後の二十八日には京都・六波羅の幕府本陣に攻め込むことを決めた。末寺末社の者たちも「遅れてはならぬ」と集まって来たのだが法事や葬式では無いから何か勘違いしている。其の怪しい兵力は十万六千にもなった。

其の軍勢が都へ押し寄せたならば六波羅（幕府）陣営は一たまりも無いのだが宗教団体の寄せ集めは多すぎても統制が取れない。近辺の友軍部隊にも事情を知らせることなく二十八日朝に鴨川西岸の法成寺へ軍勢を集結させることとした。丁度、朝飯時間の移動命令なので、空腹の俣で文句を言いながら今路から西坂に向かったのである。ところが此の情報は六波羅陣営に察知されてしまった。幕府方の幹部たちが思うには：敵の軍勢は多くても僧兵軍団であるから騎馬武者などは居ないで有ろう。然も空腹である。三条河原に待ち伏せすれば如何に優勢な敵でも徒歩戦に疲れ、重い鎧が邪魔になって短時間に戦意を失う。是こそ小をも

って大を砕き、弱（少勢力）をもって剛（強敵）を拉（ひし）ぐ妙案である…と、そこで七千余の騎馬軍勢を七手に分けて、三条河原の東西に布陣した。

攻め寄せる僧兵軍団は其れを知る術も無いから「：我先に都に攻め入り、高級旅館でも占領して観光旅行気分を満喫しよう…」と観光案内書や旅行クーポン券などを振り翳して取り敢えず法勝寺に集まってきた。其の兵力は？と言えば、今路・西坂・古塔下・八瀬・藪下・下松・赤山口に満ち満ちて、前陣は既に法勝寺真如堂に到着しているのに後陣は未だ比叡山周辺に溢れて無駄な氣勢をあげていた。如何に数が多いのか…其れに対して、敵となる幕府方武士団の兵力は十分の一にも及ばないことが分かっているから僧兵たちは既に合戦に勝利したつもりで油断する。

軍団の前陣部隊が法勝寺で後陣の到着を待っていたのだが其処に七千余の軍勢が現れた。当然、味方だと思つて出迎えたところ、是が六波羅の軍勢で、而も騎馬武者が主体の強敵であり三方向から攻撃してきた。「敵だー」と気付いても遅い。僧兵軍団は徒歩の者が主力で、見栄を張つて個人ごとに立派な鎧を身に着けているが思う様に動けない。敵は其れに付け込んで激しく射込んでくる。迫り立てられて法勝寺に逃げ込もうとしたけれども、丹波国の佐治孫五郎と言う武士が西門の前に馬を横づけにして只一騎、其の頃では未だ珍しい五尺八寸の太刀を構えていて最初に逃げて来た三人の僧兵を簡単に切り捨てた。此の時は佐治しか居なかったのだが、逃げて来た僧兵たちは法勝寺にも敵が居る…と思ひ込んでいたから寺内に入らず、只々西門から北へ逃げて比叡山へ引き返す他は無

かった。

其れでも僧兵の中には勇猛な者が居り、東塔の宿房から参加していた豪鑒、豪仙と言う二人の僧兵が戦場から団体行動で引き揚げる途中で「退却は恥ずかしい！」と気が付いた。そこで戦場に引き返し…退却した僧兵軍団の中から二人だけが戻つて来た…ことを丁寧に解説してから自分たちだけで敵陣に斬り込んで行つた。最初のうちは縦横無尽に暴れ回っていたのだが続いて来る味方が居ないから何時までも…と言う訳にはいかない。二人共に十数本の矢を受けて動けなくなり鎧兜を脱ぎ棄て共に切腹した。是を見た敵・味方から惜しまれたけれども戦況不利なので僧兵軍団は本山へ引き返し、豪鑒、豪仙の勇名だけが知られた。

○四月三日合戦の事。付・妻鹿孫三郎勇力の事

原本では触れていないが元弘三年の四月三日であらう。

先月十二日の合戦で赤松軍が思う様に勝利出来ず、幕府方が優勢の状態で数千人の敵を討つたけれども、其れで争乱が鎮圧された訳では無く僧兵軍団の動きも怪しい。そこで幕府は僧兵の御機嫌取りに十三か所の庄園を比叡山などに寄進することとし、さらに京都近辺の庄園も提供したので僧兵軍団は完全に幕府に取り込まれたことになる。

それに対して、反幕府勢力は京都の合戦などで多数の兵力を失い一万騎に足りぬ規模になつてしまつたけれども、僧兵などと違つてプロの軍隊であるから立ち直りも早い。即応できる七千余騎を二手に分けて、四月三日には再び京都へ攻め寄せて来た。殿法印良忠と言うアルバイトに僧侶も務める武将と中院定平と言う公卿の武将とが両軍の

指揮を執つて、三千余騎が伏見・木幡に火を掛けながら鳥羽・竹田方面から進撃し、其れに呼応して赤松圓心らも宇野・柏原・佐用・真島などの党を集めた三千五百余騎で西七条から攻め寄せた。此の知らせを受けた幕府方は本来ならば驚くところだが、僧兵軍団を味方に付けたりしているから六条河原に形式的な陣を布いて一応は安心していた。

それでも念の為に佐々木判官・常陸前司時朝らに三千余騎を付けて糺河原（ただすがわら）へ派遣し、更に先に三月の合戦で勝つた例に倣つて河野・陶山両武將に五千の兵を付けて法性寺大路へ差し向け、富樫・林・島津・小早川などの軍勢六千余騎を八条東寺辺りへ向かわせたほかに直轄の七千余を西七条辺りに派遣したのであるから、幕府重臣は何となく危機感を感じていたのかも知れない。千騎ほどは幕府本陣（六波羅）に残していた。

その予感が的中したのかどうか午前十時頃から、それぞれの場所で合戦が始まり敵・味方が入り混じり優劣入れ替わり差し替わり激戦を展開した。攻撃を掛けた方は騎馬の武士が少なかったので、狭い場所も歩兵が自由に利用して散々に敵を射たけれども、護る六波羅勢（幕府軍）は騎馬武者が多かったから馬力を頼りに奮戦しようと努力はしたが馬も狭い場所を嫌つて思う様には動かない。結局、両軍勢が必死で戦つても勝敗は決せず、早くも陽が西に沈み始めた。日が暮れると敵味方の見分けが難しい。それを見越した幕府方の河野・陶山両武將は両軍勢を一つに纏めて三百余騎の軍団として敵を攻めた。

騎馬軍団に本気になられたのでは勝ち目が無い

から攻めて来た敵は予定と違う……と宇治方面に退却するしかない。河野と陶山は其れに構わず竹田河原を横切り鳥羽殿の北門を回って東寺の前に居る敵を取り込めようとしたが対象にされた敵は、何となく危険を察知して羅城門の西を横切り寺戸方面に引き返した。一方、小早川と島津の軍は東寺に居た敵と戦っていたが折角、布陣していた場所を河野と陶山の軍に取られてしまい、其の所為で味方が不利になったことを無念に思い、西七条に移動し寄せて来る敵を待とうと西八条から西朱雀へ出て来た。ところが其処には敵の赤松入道が選りすぐりの軍勢三千余騎を揃えて待っていた。是を撃破するのは困難だが、逃げるわけにはいかない。

都合の良いことに近くを見ると疲れてはいるが幕府軍勢がいた。其処で説得したか強制したかは不明だが其の連中を収容し補強して目の前の敵と戦うことを決めた。両軍ともに最初は睨みあいが続いていたけれども、先ず赤松陣営から四人の者が進み出て数千騎の敵陣に向かって行った。

四人はいずれも背丈二メートルを越え、髭は伸び毗(まなじり)は裂け、身に鎖を巻いた上に鎧を纏い龍頭の兜を被り大太刀を佩き、八角の金棒を軽々と提げていたから其の様子が決然としていて古代中国の武勇伝に登場する有名な豪傑の様であつた。其れを見ていた数千の敵は恐れて近づこうとしない。相手が居無くては合戦にならないので、四人は「備中国の頼宮(はやみ) 又次郎、其の子・孫三郎、田中藤九郎盛兼、同舎弟・弥九郎盛泰……」と大声で名前だけ連呼してから「事情が有つて是まで山賊暮らしをしていたけれども、天皇の為に戦うことにした……」と、敵を扇動する目

的ながら言い訳の様な名乗りをあげたのである。

是を見た幕府軍の島津前安芸守が二人の息子と其の家臣を呼んで「……頼宮一族は名の知られた大力の者なので、大勢が向かつてても容易には討てない。我らで離れたり近づいたりしつつ、隙を見て矢を放つほかは有るまい……」と決めて其の態勢を取ったところ、其れを田中藤九郎が察知して「……名前は分からないが、我らに向かつて来るとは勇氣の有ることよ。折角なので捕虜にしてあげよう……」と笑いながら、持っていた鉄棒を振り回しつつ近づいて来る。

島津側は馬上から弓を構え敵が射程に入ったところで矢を放ったので其れが田中の顔面を射通した。幾ら勇猛な武士でも顔を射られては元気で居られない。弟の盛泰が駆け寄って矢を抜いたが傷は深い。盛泰は兄の鉄棒を取って戦ったけれども両軍で激戦となり共に多くの死者を出した。田中一族も一人で三〇本以上の矢を全身に受けて壮烈な討死をとげたので人々は其の武勇を惜しんだと言う。一方、美作国(みまさかのくに岡山北部)の菅家一族は三百余騎で四条まで攻め入り、幕府方の武田、高橋らの千余騎と戦っていたが、味方の軍勢が撤退を始めたので退かねば……と思いながらも一方では敵に後を見せるのも恥すべき行為だと……有元菅四郎佐弘、同五郎佐光、同又三郎佐吉の三兄弟は引き揚げる前に近くに居る敵を探していた。そこへ都合良く数騎の敵が現れたので是に勝負を挑んだのだが、佐弘は既に合戦で膝を斬られていたから直ぐに首を取られてしまった。けれども佐光は敵を討ち、佐吉は敵と刺し違えた。討たれた敵も三兄弟であつたらしいが双方共に一人だけが生き残つても仕方が無い……と妙な理屈で戦いを続

けていた。それを救援しようとする陣営から駆け付けた者が数十人いたらしいが全員が討死してしまつた。

一方で播磨国の妻鹿(めが) 孫三郎と言う一族は武力に優れ知恵もある武士団であり、一族十七人が官軍に属し一団となつて戦っていたが、六条坊門辺りまで攻め込んで敵を追い払い帰還する途中で三千騎の六波羅勢に囲まれた。

三千と十八とでは敵(かな) う筈が無く孫三郎だけが生き残つた。一人でも生きていれば役に立つ……と西朱雀方面に落ちて行くのを五〇余騎の敵が追いかけて来たが、其の中の青年武士が功を焦り孫三郎に近づいて鎧の袖を掴んだ。

それを孫三郎が馬上で捕らえ、ぶら下げるようにして数百メートルを進んだが、捕まつたのが「大将の息子」でもあつたのか敵が慌て出した。孫三郎は其れを睨み「敵も敵によるぞ! 一騎だと軽んじて我に近づくな! 此の者が欲しくば与えよう……受け取れ!」と叫んで放り投げた。孫三郎は怪力なので投げられた鎧武者は、救援に来た六、七騎の武者の頭上を通り越して道の向こうの深田に沈み込んでしまった。目の前で其れを見たから敵は仲間の救援どころでは無くなり、相手が一騎であることを忘れて五〇余騎が一斉に逃げ出した。妻鹿孫三郎のような目覚ましい活躍は有つたが全般には幕府軍優勢で、抵抗勢力は各地でゲリラ的な活動が続けるほかは無かつたのである。折角、蜂起した赤松入道の軍勢も諸所の合戦で思う様に勝機を得られず八百余騎が討たれてしまつた。さすがに赤松入道も愕然として氣力を失い、八幡山崎へ引き返すほかは無かつた。

(続く)